

諏訪市埋蔵文化財調査報告第22集

千鹿頭社Ⅳ

——長野県諏訪市千鹿頭社遺跡第5次発掘調査報告書——

1991. 3

諏訪市教育委員会

諏訪市埋藏文化財調査報告第22集

千鹿頭社Ⅳ

——長野県諏訪市千鹿頭社遺跡第5次発掘調査報告書——

1991. 3

諏 訪 市 教 育 委 員 会

CHIKATOU-SHA vol. IV

**AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF
ANCIENT SETTLEMENT AT CHIKATOU-SHA
NAGANO-PREFECTURE, JAPAN**

1991. 3

**THE BOARD OF EDUCATION
OF SUWA CITY**

序

千鹿頭社（ちかとうしゃ）遺跡は、諏訪湖を見下ろす扇状地の上に位置しています。伊那谷に通じる有賀峠への登り口にあり、過去の調査で市内でも有数の大集落跡であることがわかっています。

今回、住宅建設に先立つ緊急発掘調査が行われた結果、約150㎡という面積にもかかわらず縄文時代や平安時代の住居跡が8軒、そしてこれらの時代の人達のお墓などの跡と考えられる小竪穴が30基ほど検出されました。

同時に土器・石器類も多量に出土しており、なかでも平安時代の住居跡から出土したカマド形土器（持ち運びできる移動式のカマド）は、西日本の遺跡に多くみられるものですが、諏訪地方では初めて、県内でもこれまでに数点しか出土していないという珍しいものです。諏訪地方は古来、伊那谷を通じて東海地方や近畿地方とも文化の交流があったことがわかっていますが、交通の要所である本遺跡からこういった遺物が出土するという事は、当時の文化の受け入れ方を考えるうえで興味深いものがあります。今後これらの成果を、遺跡の保護に役立てていきたいと思えます。

本調査は、国庫および県費補助事業として実施したものであり、文化庁・長野県教育委員会と関係者・担当者の方々には特にお世話になりました。また、調査に際して全面的に御協力をいただいた地権者の方に心から御礼を申し上げると共に、大変寒いなかで献身的に調査に携わられた調査団および調査関係者各位の御努力に対し、深く感謝申し上げます。

平成3年3月30日

諏訪市教育委員会

教育長 両角久英

例 言

1. 本書は長野県諏訪市豊田に所在する「千虎領社（ちかとうしゃ）遺跡」（全国遺跡地図長野県番号8056・諏訪市遺跡番号305）の第5次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、住宅建設工事に先立つ緊急発掘調査であり、平成2年度国庫および県費補助事業として諏訪市がこれを実施した。
3. 発掘調査は諏訪市教育委員会が調査団を編成して行い、現場における発掘作業を平成2年12月6日から12月28日まで、整理作業および報告書作成作業を平成2年1月4日から3月まで諏訪市体育施設管理棟で実施した。
4. 本調査におけるレベル原点は標高海拔806.00mであり、本書に記載した水系レベル等は、この原点を基準とした数値（±cm）で表示した。
5. 遺構番号は、基本的に住居跡については過去の調査時から連続で付し、それ以外の遺構については各調査区ごと1号から付けている。
6. 現場における記録と整理作業の分担は次の通りである。
遺構等実測…小松・関・原・田中・平林・矢崎・五味、遺物水洗注記・土器復元・拓本…小松・関・原・矢崎、遺物実測・トレス・写真撮影…五味・青木・谷本久子
7. 本書の執筆は、Vを宮坂光昭・それ以外と編集を五味が担当した。
8. 石器の石材鑑定については五味一郎氏（原村八ヶ岳美術館）にお願いした。
9. 発掘調査および報告書作成に際し、調査・整理参加者のほかに関長人・関寿長・平出一治・五味一郎・平林とし美・小泉憲市・宮下悦蔵・藤森与一・小林深志・小坂英文・村松一秀・亀割均・高見俊樹・長野中央ナショナル住宅諏訪営業所・金子工務店・長野県教育委員会文化課各氏（順不同・敬称略）の御協力・御指導を得た。記して感謝申し上げます。
10. 本調査の出土遺物と諸記録は、諏訪市教育委員会が保管している（遺物注記 TKA5）。



目次

序

例言

目次

I 調査にいたる経過

1. 保護協議の経過……………1
2. 調査組織……………1

II 調査状況

1. 調査の方法と概要……………2
2. 調査日誌……………2

III 位置と環境

1. 遺跡の位置と環境……………4
2. 過去における発掘調査……………4
3. 発掘区の位置と基本層序……………6

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物……………9
 - (1)住居跡……………9
49号・51号・52号・53号・54号住居跡
 - (2)小堅穴……………23
 - (3)集石……………27
3号・4号集石
 - (4)その他の出土遺物……………27
2. 古代の遺構と遺物……………31
 - (1)住居跡および集石……………31
48号A・48号B住居跡(2号集石)
・50号住居跡(1号集石)
 - (2)小堅穴……………38
 - (3)その他の出土遺物……………38
3. 附表……………39

主要参考文献……………40

V 結語……………41

写真図版

図版目次

第1図	千鹿頭社遺跡の位置	4
第2図	周辺遺跡分布図	5
第3図	発掘区的位置	6
第4図	千鹿頭社遺跡5区全体図	7
第5図	千鹿頭社遺跡5区土層断面図	7
第6図	遺構分布図	8
第7図	千鹿頭社遺跡5区49・54号住居跡平面図・エレベーション図 49号住居跡出土遺物1	10
第8図	千鹿頭社遺跡5区49号住居跡出土遺物2	11
第9図	千鹿頭社遺跡5区51・52号住居跡平面図	12
第10図	千鹿頭社遺跡5区51・52号住居跡エレベーション図 51号住居跡出土遺物1	13
第11図	千鹿頭社遺跡5区51号住居跡出土遺物2	15
第12図	千鹿頭社遺跡5区52号住居跡遺物分布図	16
第13図	千鹿頭社遺跡5区52号住居跡出土遺物1	17
第14図	千鹿頭社遺跡5区52号住居跡出土遺物2	18
第15図	千鹿頭社遺跡5区52号住居跡出土遺物3	19
第16図	千鹿頭社遺跡5区53号住居跡平面図・エレベーション図・出土遺物	21
第17図	千鹿頭社遺跡5区54号住居跡出土遺物	22
第18図	千鹿頭社遺跡5区縄文時代等小堅穴平面図・セクション図1	24
第19図	千鹿頭社遺跡5区縄文時代等小堅穴平面図・セクション図2	25
第20図	千鹿頭社遺跡5区縄文時代等小堅穴出土遺物	26
第21図	千鹿頭社遺跡5区3号集石平面図・エレベーション図・出土遺物	27
第22図	千鹿頭社遺跡5区遺構外出土遺物1	29
第23図	千鹿頭社遺跡5区遺構外出土遺物2	30
第24図	千鹿頭社遺跡5区48号A・B住居跡出土遺物	31
第25図	千鹿頭社遺跡5区48号A・B住居跡・2号集石平面図 ・エレベーション図	32
第26図	千鹿頭社遺跡5区48号A・B住居跡エレベーション図	33
第27図	千鹿頭社遺跡5区50号住居跡平面図	34
第28図	千鹿頭社遺跡5区50号住居跡遺物分布図 ・1号集石平面図・エレベーション図	35
第29図	千鹿頭社遺跡5区50号住居跡出土遺物1	36
第30図	千鹿頭社遺跡5区50号住居跡出土遺物2	37
第31図	千鹿頭社遺跡5区20・24号小堅穴平面図	38
第32図	千鹿頭社遺跡5区遺構外出土遺物3	38

附表目次

第1表	千鹿頭社遺跡5区小堅穴一覽表	39
第2表	千鹿頭社遺跡5区実測図掲載石器等一覽表	39
第3表	千鹿頭社遺跡5区出土石器等集計表	40

I 調査にいたる経過

1. 保護協議の経過

平成2年2月、(株)長野中央ナショナル住宅諏訪営業所より市教委に対して、豊田有賀地籍の農地について個人住宅建設の予定があるが、埋蔵文化財包蔵地内に該当するかという旨の問い合わせがあった。市教委では、該当地点は縄文時代～平安時代を中心とした複合遺跡である千鹿頭社遺跡の範囲内に相当する旨回答した。同年4月以降、地主である関長人氏および事業者である関寿長氏と市教委の間で保護協議を行った結果、住宅建設に先立ち記録保存のための緊急発掘調査を行うこととし、調査は費用負担も含め市教委が主体者となって行うこととした。市教委では、この調査を、平成2年度国庫および県費補助事業である「市内遺跡発掘調査事業」の一部として行うこととし、調査団を編成して準備を行った。

補助事業決定の経過(抄)

平成2年4月18日付2教社第25号平成2年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書

同第29号文化財保護事業補助金交付申請書(県費)

平成2年7月24日付2教文第1-18号国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書(国庫)

平成2年10月12日付長野県教育委員会教育長指令元教文第2-12号(県費)

2. 調査組織

千鹿頭社遺跡調査団(5区5次)

団長	両角久英 (諏訪市教育委員会 教育長)
副団長	三ツ橋取 (諏訪市教育委員会 教育次長)
調査主幹	宮坂光昭 (諏訪市文化財審議委員・日本考古学協会会員)
調査員	五味裕史 (諏訪市教育委員会学芸員・長野県考古学会会員)
調査団員	小松とよみ・関 喜子・田中 由・原 敏江・平林和子・矢崎つな子
整理参加	青木正洋 (長野県考古学会会員)

事務局

事務主幹	小平 武 (諏訪市教育委員会 社会教育課長)
事務局長	小松勇次 (諏訪市教育委員会 社会教育係長)
事務局員	有賀静江 (諏訪市教育委員会 社会教育係)
	五味裕史 (諏訪市教育委員会 社会教育係)

Ⅱ 調査状況

1. 調査の方法と概要

過去における周辺部の調査および事前の表面採集の結果、今回の調査区内も遺構・遺物が濃密に分布することが予想されたため、調査は、全面発掘を想定して調査区の地形にあわせた2m方眼のグリッド枠を組み、任意のグリッドを掘り下げる方法で行っていった。

本遺跡は縄文時代前期の遺構・遺物を多く出土する遺跡として有名であるが、調査開始直後から縄文時代中期の土器片を中心とする遺物が多量に検出された半面、前期の遺物については一部の小竪穴に伴うもの以外にはあまり検出されなかった。

調査の結果、遺構としては住居跡8基・小竪穴30基・集石遺構4基が検出されている。住居跡はほとんどが重複あるいは調査区外にかかっているため、ほぼ全面的に完掘出来たのは52号住居跡のみである。遺構は前述のように重複が著しく、例えば平安時代の住居跡でも、縄文時代の住居跡を壊して掘り込んでいるためと思われるが、出土遺物の半分以上が縄文土器、といった状態であった。

遺構の重複・多量の遺物に調査が難航したうえ、凍結および降雪のために発掘調査を行うには限界の時期であり、困難な状況のなかで調査団員の皆さんには大変御苦労いただいた。

千鹿頭社遺跡5区(5次)発掘調査の概要

調査面積	約150㎡
検出遺構	住居跡 縄文中期5・古代1・平安2 計8基 小竪穴 30基 集石遺構 4基
検出遺物	縄文土器/復元8個体・破片コンテナ15箱 石器類/コンテナ3箱 土師器・須恵器・灰輪陶器/復元8個体・破片コンテナ2箱 鉄製品/紡錘車1・鐵1・釘1他 土製品/甕形土器1個体 他

2. 調査日誌(抄)

12月6日 器材搬入・グリッド設定を行い調査開始。

- 7日 グリッド掘り下げ。各グリッドより縄文中期土器片・黒曜石片・土師器片等検出。
2・3Dグリッド耕作土下から縄文後期土器片検出。6Bグリッド耕作土下から土師器片がわりと多く検出されたため、サブトレンチを設定しさらに掘り下げたところ、ロームの床面を検出。48号住居跡と命名した。
- 10日 6Fグリッドにて小竪穴3基検出。6～8Gグリッドにて住居跡と思われる落ち込みを検出。
- 11日 各グリッド拡張・掘り下げ続行。8Gグリッド付近で住居跡検出(50住)。
- 12日 6～8D付近にて2基重複した縄文時代の住居跡を検出(51・52住)。切り合い関係確認のためサブトレンチを設定、52住の石囲い炉を検出した。
- 13日 48・50住居跡掘り下げ開始。48住は床面が2段になっており、2基重複しているものと思われる。東側をA、西側をBとする。
- 14日 50住覆土中に集石を検出(1号集石)。
- 15日 48住Bプラン確認。50住遺物分布図・1号集石平面図等作成。
- 17日 50住カマド掘り下げ開始。カマド横から鉄製紡錘車検出。
- 18日 9Cグリッド現表下5cmの耕作土中から完形の灰釉陶器碗検出。49住掘り下げ。50住調査終了し、さらに掘り下げたところ床面直下に石囲い炉検出。53住と命名。
- 19日 51住掘り下げ開始。これまで覆土上面の精査から、51住が52住を切っていると考えていたが、実は逆であったらしい。53住掘り下げ開始。
- 20日 51・52住掘り下げ。2つの住居跡の境界付近に拳大礫を集積したものを2基検出。下部に落ち込みを有すると思われる。18・19号小竪穴と命名。
- 22日 49住床面の下から加曾利E系深鉢一括出土。縄文中期の住居跡と考えられるため54住と命名。52住東側部分の拡張掘り下げを行い、ほぼ全面的にプランを確認する。
- 25日 52住床面精査。埋甕2基を検出。
*遺物の残存が割と良好な住居跡を完掘ということで、本日急遽豊田区公民館において放送していただき、午前11時から遺跡見学会を行った。急な呼び掛けにもかかわらず、100名余りの地元の方々に参加していただいた。
- 28日 朝一番で雪掻き作業。52住付近完掘・平面図作成。

Ⅲ 位置と環境

1. 遺跡の位置と環境 (第1・2図)

千鹿頭社遺跡は、諏訪盆地南西側を画する守屋山等の山塊の山地末端部、標高約780~820mの北東~東向きの緩やかな斜面上に位置している。千鹿頭神社を中心としたこの一帯は、中沢川が山地から平坦部に流れ込む地点に発達した扇状地の北半部にあたり、千鹿頭神社周辺には湧水が豊富である。現在は諏訪湖を北側400mほどにのぞむが、現在水田となっている遺跡直下東側の沖積地は、過去のある時期においては低湿地または湖中であつたと思われる。北側には著名な灰釉水鳥鉦蓋付平瓶が出土した鐘鐺場遺跡が、南側には縄文時代前期~平安時代にかけての集落跡である十二ノ后遺跡および女帝垣外遺跡・中道遺跡などが隣接している。千鹿頭社遺跡自体も、縄文時代から平安時代にかけての多数の遺構と膨大な遺物が検出されている過去の調査において明らかのように、古くからの集落跡である。なお、千鹿頭社遺跡と十二ノ后遺跡・女帝垣外遺跡は、実際には連続した一つの遺跡であると考えられており、中央道建設時の発掘調査においてもそれを裏付けるような結果が得られている。

この地区は、茅野市の杖突峠とならび諏訪盆地と伊那谷の間の主要な交通路である有賀峠への登り口であり、古代から政治・経済上重要な位置を占めていたと考えられ、南側の尾根端部には中世の山城である有賀城跡が位置しているほか、周辺遺跡の多くが縄文時代から近世にかけての複合遺跡となっている。従って、この地区一帯は古代から一大集落地として、人々の生活の中心地の一つであつたと思われる。



第1図 千鹿頭社遺跡の位置 (1/200,000)
諏訪教育会発行1/100,000図使用

2. 過去における発掘調査 (第3図)

千鹿頭社遺跡では過去において何回かの発掘調査が行われている。その概略については『千鹿



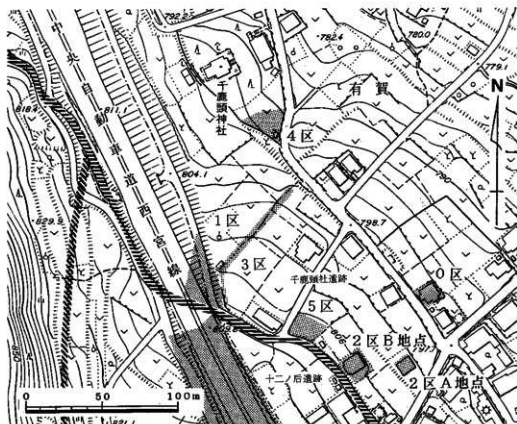
第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

番号	遺跡名	立地	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
				早	前	中	後	晩						
301	神送り山	山頂				●	●					●	●	
302	鑄揚げ	丘陵	●	●										
303	甌	原			●				●			●		
304	鑄場	丘陵		●	●	●	●		●	●		●		
305	千鹿頭社	扇状地		●	●	●	●	●	●	●		●	●	
306	十二ノ后	扇状地	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	
307	女帝垣外	山麓			●	●	●					●		
308	女帝塚	山麓			●					●		●		
309	久保塚古墳	山腹							◎					
310	丹羽屋敷	山麓										●	●	
311	清水	山麓		●	●	●	●	●	●			●	●	
314	有賀城跡	山頂											●	
315	中遺	山麓			●				●	●				
316	鑄場古墳	丘陵								◎				

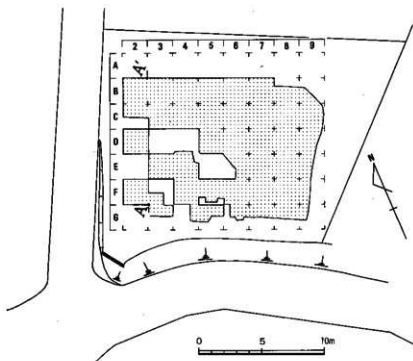
頭社Ⅲ』に記したが、第0～4次・6地点の調査によって49基の住居跡と110基あまりの小竪穴等が検出されている。また、千鹿頭社遺跡に隣接し実質上同一遺跡を構成していることが判明している十二ノ后遺跡では、昭和49・50年に行われた中央自動車道建設に先立つ緊急発掘調査で、140基余りの住居跡と197基の小竪穴、方形柱穴列2基等が検出されている。

3. 発掘区の位置と基本層序(第4・5図)

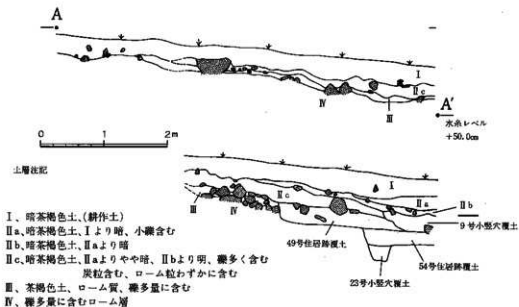
今回の調査区は2区B地点と3区の間、扇状地の最も盛り上がった部分にあたり、地表からローム上面までは約20～40cmと浅く、区域北端付近および遺構の掘り込みがある部分を除いては耕作による攪乱がロームに達している。区域北端付近では耕作土下に縄文時代後期遺物包含層と中期遺物包含層が認められる。耕作土下半から地山のローム層にかけては、拳大～数10cm大の礫を多く含んでいる。1区・2区B地点・3区で検出された縄文時代前期の遺物包含層(遺構検出層)である黒色土層は検出されていない。



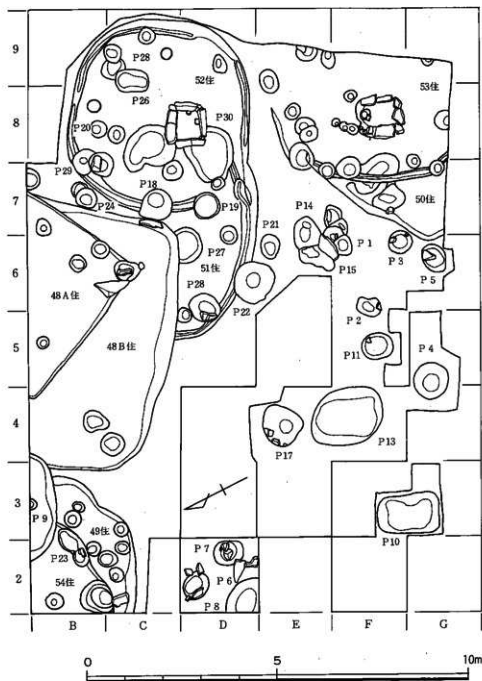
第3図 発掘区の位置(S=1/2500)



第4図 千鹿頭社遺跡5区全体図 (S=1/300)



第5図 千鹿頭社遺跡5区土層断面図 (S=1/60)



第 6 図 遺構分布図 (S=1/100)・Pは小竪穴

IV 遺構と遺物

5区は千鹿頭社・十二ノ后遺跡の中央部付近に位置していることもあり、縄文時代および古代の遺構がかなり重複して検出された。遺物は縄文前期以降の縄文土器片・石器類、弥生土器片、土師器・須恵器片、灰釉陶器等が検出されているが、特に中期後葉の土器片が多くを占める。弥生土器は細片が数点検出されたのみである。

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

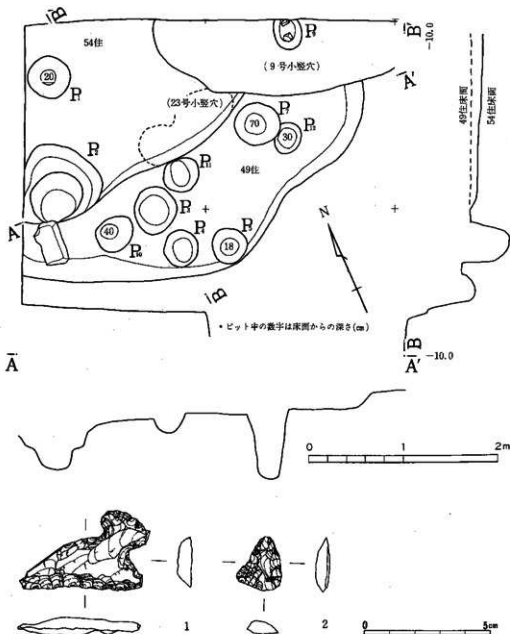
49号住居跡(第7・8図)

調査区北端に位置し、3分の2ほどは区域外となっている。2Bグリッドにおいて黒褐色土中に床面と思われる水平な面を検出したため存在が確認された。

平面形は明確でない。柱穴等のピットは、ローム層を掘り込んだ部分では検出できたが、54住覆土を掘り込んで床とした部分では検出が不可能であったため、54住を掘り下げたあとで、49・54住分を一括して番号を付した。主柱穴としてはP2・7が考えられるが明確ではない。確認された掘り込みはローム上面から約15cmで、覆土中には拳大～人頭大礫を多く含んでいた。床はあまり堅くなく、54住覆土を掘り込んだ部分では、黒褐色土中に拳大礫が数点、平面的に分布していたために床面であると判断できたような状況であった(この礫は敷石等ではなく、54住覆土中の礫である)。炉等は調査区内では検出されていない。なお、北東側を9号小竪穴に切られている。所属時期は、当初覆土直上および覆土上層から加曾利B2～3式土器がまとまって検出されたため、縄文後期と見え、遺跡見学会等においてもそのように発表していたが、遺物を検討した結果にもとづき、この場を借りて中期後葉の曾利V式期に訂正しておきたい。

遺物としては、覆土中から縄文時代前期～後期土器片・石器類等が検出されている。石器は石鏃2・石匙1・磨石・凹石7等が検出されている。1はチャート製の石匙で、背面からみて左上辺に自然面を残す。調整は周辺部を中心に、おおむね全辺に加えられているが、腹面刃部には使用痕と思われる微細な剝離が認められるだけである。腹面には1次剝離面を広く残している。2は黒曜石製で、一応石鏃としたが、尖端部(?)の造りだしが甘く、左右非対称形である。背面から見て右辺の腹面側には2次調整による剝離が認められないため、他の器種か未製品である可能性もある。土器片には器形全体を窺えるようなものはない。中期後葉のものが主体であるが、なかでも棒状工具・櫛状工具による列点・ハの字状列点文等を施したものが割合目立つ。第8図6・8は櫛状工具による列点文が施文される。いずれも焼成は良好で胎土に白色粒子・石英粒を

含み、暗褐色を呈するが、8の列点はハの字状を呈する。7は胎土に石英粒・白色粒子を含み焼成は良好、外面淡茶褐色・内面暗褐色を呈する。6・7は複数の沈線による縦位区画が加えられる。9は地文に縄文を施した後、やや強いナヅリによる沈線区画が加えられている。胎土に砂粒・石英粒を含み焼成は良好、やや淡い灰橙色を呈し、外面には煤の付着が認められる。他に、綾杉状の条痕が施された弥生時代中期の土器片が1点検出されている。



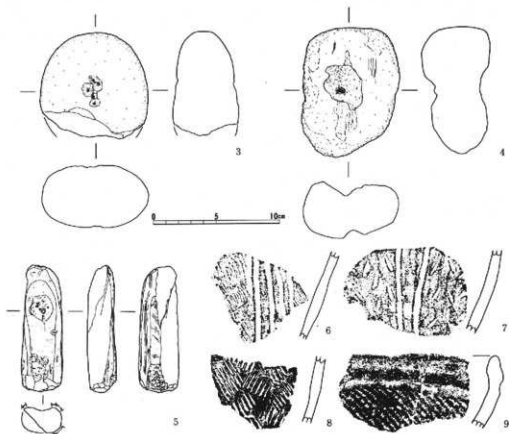
第7図 千鹿頭社遺跡5区49・54号住居跡平面図・エレベーション図(S=1/40)
49号住居跡出土遺物1(S=2/3)

51号住居跡（9～11図）

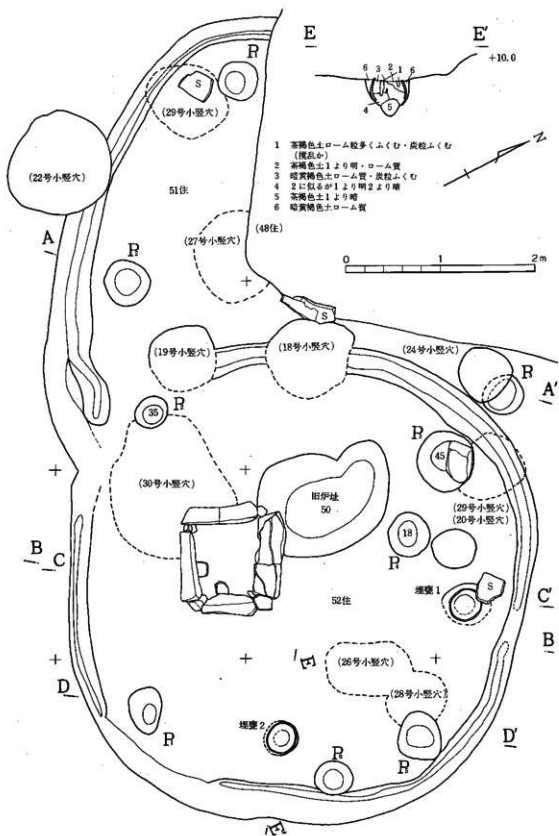
区域東側に位置し、48住（古代）・52住（縄文中期）・18・19・22号小竪穴に切られる。重複と耕作による攪乱のため、床面は西側部分のみ残存していた。

平面形は不明だが、胴張り隅丸の方形に近い形になる可能性がある。壁溝がめぐるが、52住との重複部分については検出することが出来なかった。炉は検出されていないが、48住Bの壁面上に細長い礫があり、これが炉石の残存であると思われる。床面は礫を多量に含むローム層を掘り込んでそのまま床としており、比較的良好に残存していた。柱穴はP1～3が該当するが、他は不明である。西隔壁近くの床面上には平石が置かれていた。直接時期決定の根拠となる遺物は検出されていないが、小竪穴および52住との切り合い関係と覆土中検出の土器片類の時期から、中期後葉曾利Ⅰ式期前後と考えられる。

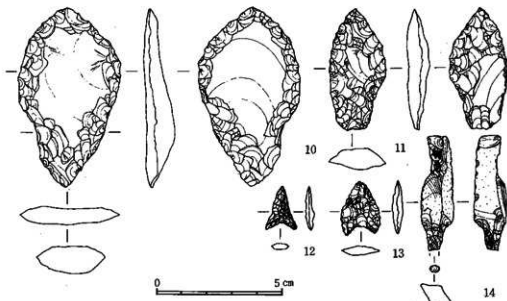
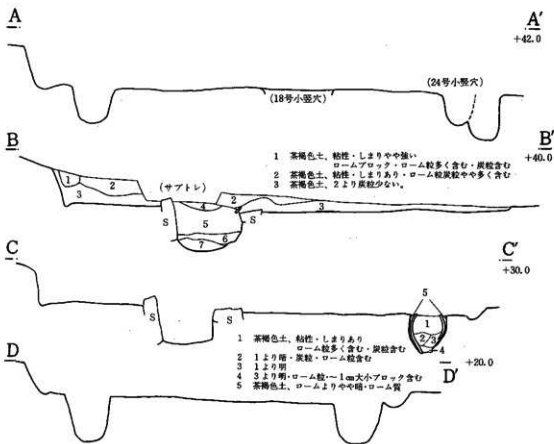
定型的な石器類は約20点が検出されている。10・11は尖頭器様の石器である。10はガラス質安山岩製で、表面は風化してしまっている。木葉形を呈するが、尖端側はやや左右非対象であり、基部側の1辺に着柄のためと思われるえぐりが加えられる。幅広の剥片を素材としており、両面



第8図 千鹿頭社遺跡5区49号住居跡出土遺物2（S=1/3）



第9図 千鹿頭社遺跡5区51・52号住居跡平面図 (S=1/40)



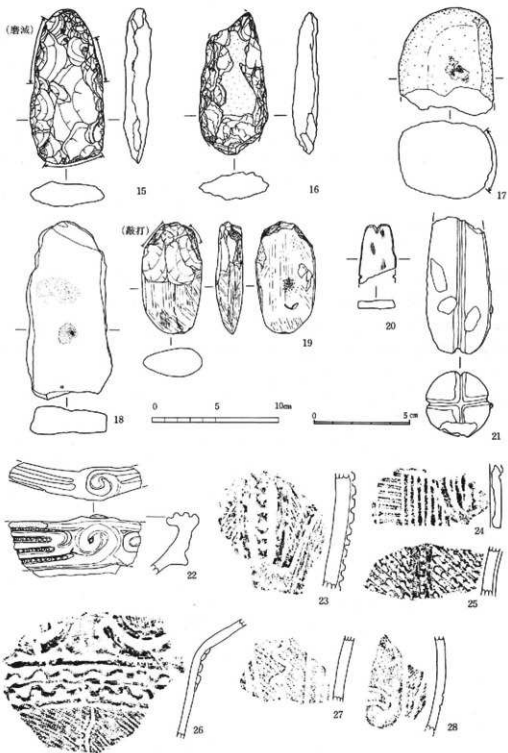
第10図 千鹿頭社遺跡5区51・52号住居跡エレベーション図 (S=1/40)
51号住居跡出土遺物1 (S=2/3)

に素材剥片の面を広く残す。2次調整は周辺部にのみ加えられ、かなり不規則ではあるが表裏交互に剝離を行っている。11は両面に加工が加えられるが、表裏の一部に素材面を残す。基部は平坦で、右辺の基部側は内彎するようにえぐれている。灰赤色のチャート製である。11については、前期遺物の混入品である可能性も考えられる。14は柱状の黒曜石原石の一端に加工を加えて先端を造りだした石錐であり、先端を欠損する。15は硬砂岩製の打製石斧で、先端部のほかに基部側の左右両辺に摩滅が認められる。18は板状の輝石安山岩製の凹石である。19は塊状緑色岩製の磨製石斧で、基部側に再生のためと思われる剝離が加えられており、両肩部には敲打痕が顕著に残る。また、片面の中央部には先端の尖ったものを打ち付けたと思われるキズが集中している。20は粘板岩、21は柔らかい輝石安山岩製の石錐である。出土土器は、器形全体を窺えるようなものはない。縄文前期～後期の土器片が検出されているが、中期中葉末から後葉にかけてのものが主体である。22は口辺部に刺突文を伴う隆帯張り付けの横文様帯を有する土器で、浅鉢形土器の破片であろう。25は胎土に石英粒と金雲母を多く含み、棒状工具の連続刺突で器面を埋める。28は磨消縄文でJ字形のモチーフを描く後期初頭の土器で、混入品と考えられる。

52号住居跡（第9・10・12～15区）

調査区東側、耕作土下のローム層上面で51住と共に検出された。検出当初、覆土の切りあいから、52住のほうが古いと判断したが誤認で、掘り下げた結果51住の床上にローム土を張って52住の床を築いていることが判明した。床面のレベルは52住の方が数cm高い。本住居跡の南側覆土上層に3号集石が、東壁近くの覆土中に4号集石が検出されており、さらに北側の覆土上面から20号小竪穴が掘り込まれている。

平面形はやや角張った円形で、壁溝がめぐる。床面は良好に残るが、東隅側は地表から割合と浅いため、部分的に攪乱を受けている。なお、西壁の51住との境界付近は山芋栽培のために床面付近まで攪乱を受けており、一部プラン・壁溝が不明確である。中央やや南西よりに方形の石囲い炉が残存しているが、平面図作成後の床面精査の結果、炉北側の貼床の下から同じ住居跡の旧炉址が検出された。最初25号小竪穴と命名したが、位置関係や、底面付近がよく焼けており、焼土の堆積が認められたことなどから炉址であると判断した。新炉址には炉石がすべて残存していたのに対し、旧炉址は炉石がすべて抜去されており、炉内から数点の拳大礫と若干の遺物が検出されただけであった。旧炉址覆土は炭粒を含んでいるほかは地山とほとんど区別がつかないほど純粋なローム土であり、新しい炉を掘り込んだときの排土をそのまま埋めたいらしい。本住居跡からは埋壘が2基検出されている。埋壘1は北東壁よりに設置され、蓋石と考えられる平石がややずれた恰好で床面上に検出されている（攪乱のためずれてしまった可能性もある）。埋壘としてピット内に正位に据えられた深鉢は、底部を欠損しており、内部にはローム粒混じりの土が詰まっていた。埋壘2は南東壁よりの貼床の下から検出されており、胴部下半を欠く深鉢を逆位に据えている。蓋石は検出されていない。本住居跡に伴う可能性があるピットは数基検出されたが、



第11図 千鹿頭社遺跡5区51号住居跡出土遺物2 (S=1/3、20・21のみS=1/2)

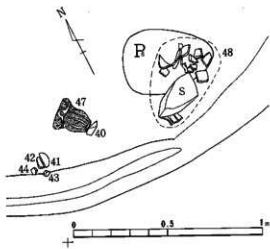
主柱穴に相当するのはP1～3・5であると思われる。

本住居跡からは炉址と埋壺が2基ずつ検出されているが、一般的にこの時期の住居では中央部のやや奥壁よりに炉が、出入り口部付近に埋壺が設置されることを考えると、その位置関係から新炉址と埋壺1、旧炉址と埋壺2が対応するものと思われる。さらに、旧炉址と埋壺2は貼床下の検出（いずれも柱穴検出のための床面精査時に検出されたため、第8図の埋壺2の断面図に貼床部分は図示できなかった）であるので、52住新築時には埋壺2付近に出入り口部があり、その後出入り口部を約90度変換して埋壺1付近に移動したことになる。しかし、主柱穴や壁溝の在り方からは改築・拡張・建て替え等の痕跡を明確に捉えることができないため、改築（出入り口部の移動）にあたっては柱の位置をまったく、あるいはほとんど移動していないらしい（本住居跡は4本柱と考えられるので、出入り口部を90度変換する場合には柱の位置を大きく移動する必要はない）。

住居跡南壁際付近の床面直上で、黒曜石剥片5点の集積と土器2個体が検出されている。土器は1個体が小型の深鉢で横位で検出され、底部を欠損する以外はほぼ完形である。もう1個体は、深鉢約3分の1個体分ほどの破片が一括でP6上面から検出された。

本遺構の所属時期は、18・19号小竪穴との切り合い関係と出土土器から中期後葉の曾利Ⅱ式期末～Ⅲ式期と考えられる。

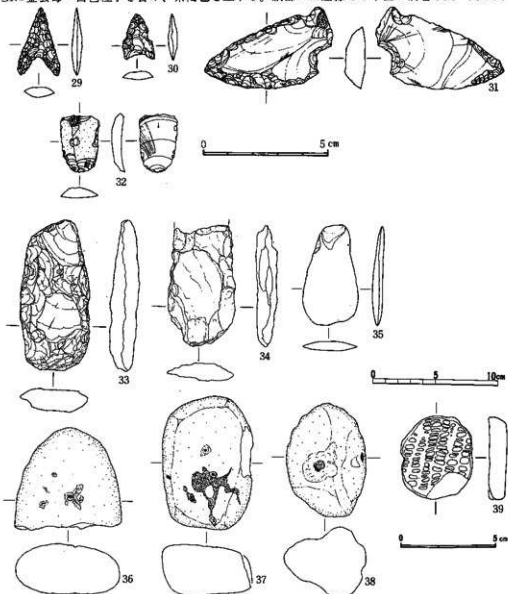
遺物は、石器類・土器片類が多く検出されているが、定型的な石器としては石鏃・打製石斧・石匙・凹石等10数点が出土している。第12図29・30は両面加工の黒曜石製石鏃で、30は左右両辺から打撃を加えてえぐり込みをつくっている。31は頁岩製の石匙であり、刃部先端とつまみ部以外は片面のみの加工となっている。32は拇指形の黒曜石製石器で、背面に自然面を広く残し、周辺部に小規模な調整を加え形を整えている。スクレイパーの一種と考えたい。34は、やや変成を受けた柔らかい粘板岩製の打製石斧で、半欠品である。35は34の石材より強い変成を受けた点紋斑岩製の打製石斧で、指でこすると粉状に剥落するような柔らかい石材であるため、表面がほとんど摩滅してしまっている。36・37は輝石安山岩製の磨石であるが、表裏面に打撃痕または小さな凹みを有する。37の表面には茶色の物質が付着している（スクリーン・トーン部分）。38は柔らかい輝石安山岩製の凹石で、4面に凹みを有する。土製品としては土器片（39）が1点検出されている。黒曜石集積中の剥片は第13図40・41が接合するが石核にあたるものは検出されていない。44以外は周縁部の一辺に連続



第12図 千鹿頭社遺跡5区52号住居跡遺物分布図(S=1/20)

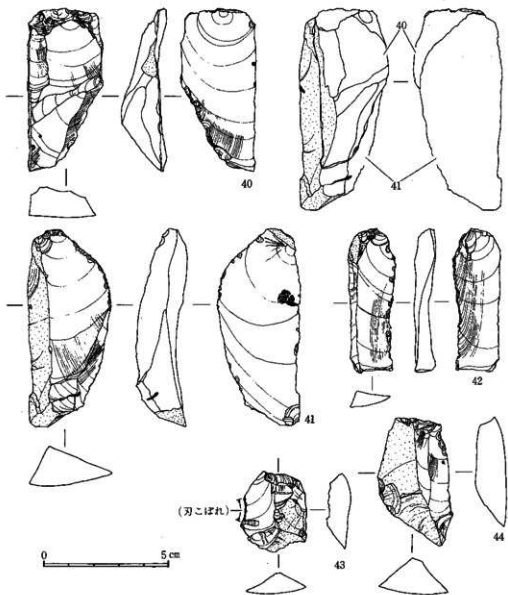
的な小剥離あるいは刃こぼれ、刃つぶれが認められる。

土器は、復元可能な深鉢が4個体と、土器片類が検出された。土器片類は縄文前期～晩期にわたる破片が検出されており、その点数は中期・前期・後晩期の順に多いが、中期後葉のものが多くを占め、後晩期は十数点程度のみである。第15図45は埋壘1、47は埋壘2に使用された土器で、45は正位、47は逆位で検出されている。いわゆるタル形の唐草文系深鉢であり、胴部下半を欠損する。45は口径29.7cm、胎土に石英粒・金雲母を含み、明茶褐色を呈し胴部上半外面に煤が付着する。胴部を縦の隆線で区画し、2本1組の隆線で3単位の逆J字文を描く。47は口径32.6cmで胎土に金雲母・白色粒子を含み、茶褐色を呈する。胴部には隆線で4単位の溝巻き文・剣形文が



第13図 千鹿原社遺跡52号住居跡出土遺物1 (29~32・S=2/3, 33~38・S=1/3, 39・S=1/2)

描かれる。口縁直下には沈線による渦巻文等が描かれるが、1単位のみ渦巻きの方向が異なる（図中矢印）。文様・地文の沈線のひき方などの点で、45の方が47よりもやや簡略化していると言えよう。46・48はいわゆるキャリパー形を呈する深鉢である。46は口径12.2cm・推定器高約17.5cmを測り4単位の文様が施される。胎土に砂粒をやや多く含む焼成は良好で茶褐色を呈し、底部



第14図 千鹿頭社遺跡5区52号住居跡出土遺物2 (S=2/3)

のみ輪積み部分から欠損する。内面は丁寧なヨコミガキで、外面は隆帯張り付け一縄文一沈線・隆帯脇のナゾリの順に施文される。外面のくびれ部と口縁近くにはススが付着している。48は約3分の1個体程が残存し、推定口径約19cmを測る。5ないしは4単位の文様構成であり、胎上に砂粒を含み褐色を呈する。外面上半にススの付着が認められる。46・48は器形や地文に縄文を有する点などから、関東に分布の中心をもつ、加曾利E式土器の影響下にあると考えられるが、口辺部文様帯のモチーフなど在地的要素が強い。ただし48の、胴部に垂下する貼付け隆帯上にも縄



第15図 千鹿頭社遺跡5区52号住居跡出土遺物3 (S=1/4)

文が施される点や、口辺部文様帯下に重弧文風の沈線が施される点などは、在地系の土器群のなかでも一般的ではない。

53号住居跡（第16図）

調査区南隅から検出された。隅丸方形の平面プランをもち、壁溝がめぐるが、およそ3分の1ほどは調査区域外であり、また、東側の壁は住居跡の掘り込みがロームに達していないため不明確である。上層から古代に属する50号住居跡が掘り込まれているため、覆土は厚さ12～3cm程しか残存していなかった。ピットは10数基検出されているが、支柱穴に該当するものは特定できなかった。方形の石囲い炉は北東側の炉石が抜かれており、これは上記の50号住居跡の支柱穴の掘り込み時に抜去されたものと思われる。炉の北側床面直上から50が、炉の覆土上面から49が検出されている。遺構の所属時期は図示した遺物等から中期後葉曾利Ⅲ式期と思われる。

遺物は遺構の残存状況があまり良くないこともあって割合と少ない。定形的石器としては石錘（欠損品）とピエス・エスキュー各1点のほか、凹石・磨石類が3点検出されている。

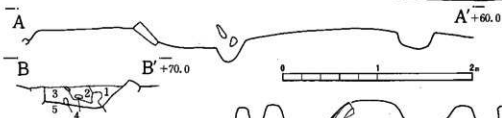
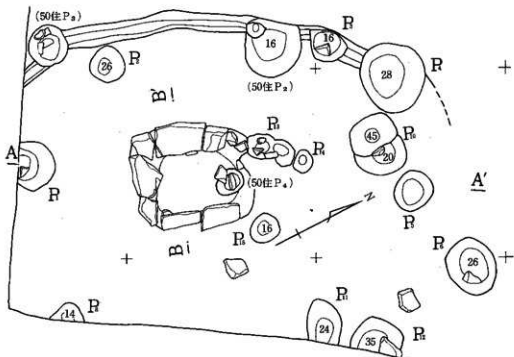
土器は破片がテンパコ1個分検出されているが、縄文前期後葉の土器片数点と50住からの混入品と考えられる土師器・須恵器片若干を除き、ほとんどが中期後葉に属する。49は約4分の1周が残存する深鉢の底部であり、底面には網代底をのこす。50は8単位の波状口縁となる深鉢の胴部上半で、約4分の1周からの復元実測である。口辺部が肥厚し、沈線と刺突による文様を加えられる。

54号住居跡（第7・17図）

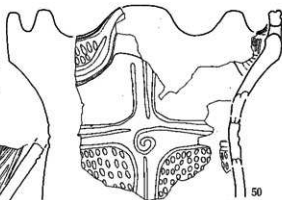
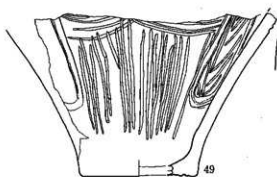
49号住居跡の床面下から検出された。礫混じりのロームを掘り込んで床としているが、調査区域の北隅にあり、平面プラン等は不明である。上部に49号住居跡が掘り込まれているため、壁および覆土は数～10数cmしか残存していなかったが、床面上につぶれたような形で2・3個体程の土器の破片が検出されている。遺構の所属時期は出土土器から、中期後葉曾利Ⅲ～Ⅳ式期であると考えられる。

検出された遺物は、石器類は石匙（欠損品）・打製石斧各1点と凹石・磨石類が2点検出されている。また、礫石錘（第17図51）と土製円盤（52）が1点ずつ検出された。

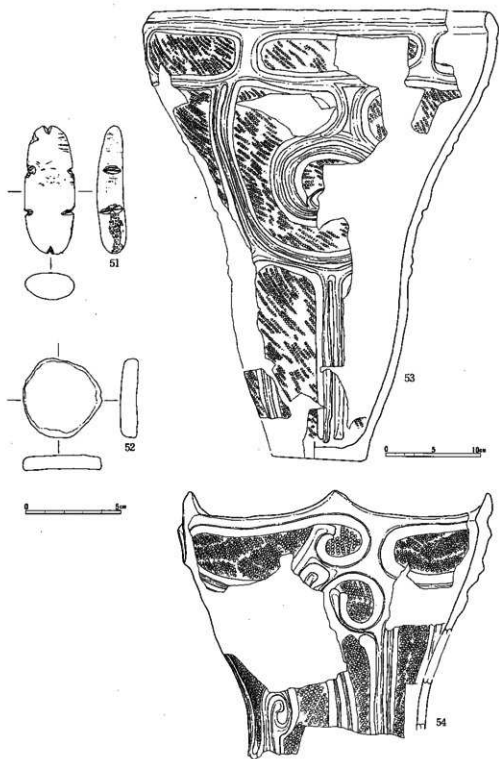
土器は図示したもののほかに縄文中期中葉から後期の土器片が検出されているが、ほとんどは中期後葉に属するものである。53・54は共に縄文を地文に有し、胴部が緩くびれる形態の深鉢である。53は約3分の1周からの復元実測で、推定口径35.6cm・底径9.7cm・器高48.0cmを測る。胎土に砂粒子を含み、明褐色を呈する。口辺部には隆帯による6単位の区画文が、胴部には2本1組の隆帯による3単位の大型渦巻き文が施される。54は推定口径31.5cmを測り、4単位の波状口縁を呈する。胎土に砂粒・赤色粒子を含み焼成は良好、明褐色を呈するが黒斑を有する。隆帯貼り付け後縄文を施文し、さらに沈線と隆帯脇のナゾリを加えている。



1. 暗茶褐色土 炭粒・スコリア粒・ローム粒ふくむ
2. " 炭粒・ローム粒やや多くふくむ、スコリア粒ふくむ
3. 茶褐色土 ローム粒多くふくむ、ローム小ブロック、焼土粒・炭粒ふくむ
4. 攪乱 5. ソフトローム



第16図 千鹿頭社遺跡5区53号住居跡平面図・エレベーション図 (S=1/40)
53号住居跡出土遺物 (S=1/4)



第17图 千鹿头社5区54号住居跡出土遺物(51·52…S=1/2、53·54…S=1/4)

(2) 小堅穴 (第18~20図)

調査区全体で約30基の小堅穴が検出されているが、古代に属すると考えられる20・24号小堅穴と所属時期不明の3~6・9・11号小堅穴以外は縄文時代前期中葉~中期のものである(12・16号は欠番)。なお、例言で述べたように、住居跡以外の遺構番号は各調査区ごとに1号から付しているため、本来なら例えば5区の〇〇号小堅穴は5-〇〇号小堅穴というように記述すべきであるが、本報告では「5-」をすべて省略して記述してある。以下、特徴的な小堅穴について略述する。

出土遺物から前期に属すると考えられるのは2・10・13・23・27号で、いずれも覆土がローム質、あるいはローム土である。2号小堅穴は不整形の浅い落ち込みで、覆土上面から緑色片岩製の打製石斧(第20図55)と浅鉢形土器(56)が検出されている。10・13号小堅穴は不整丸長方形を呈し、共に炭粒子・細砂粒を含むローム土を覆土に有する。

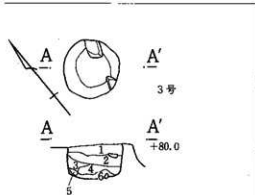
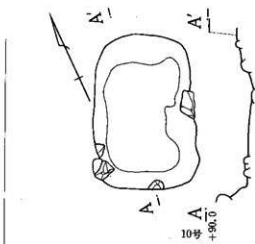
中期に属するものとしては1・7・8・14・19・21・22・26・28・29号小堅穴が挙げられる。17~19・22号小堅穴は、ほぼ円形の平面プランを有し、覆土中から覆土上面にかけて拳大~人頭大の礫が集中していた。興味深いのは51・52住の重複部に位置する18・19号小堅穴のありかたで、2基の小堅穴は51住の床面を壊して掘り込んでおり、さらに52住の貼り床は、部分的に両小堅穴の上面に貼られていた。この切り合い関係と出土遺物により判断した各遺構の所属時期から、51住構築・使用(曾利Ⅰ式前後)⇒廃棄(・埋没?)⇒18・19号小堅穴掘り込みおよび目的物の埋納(曾利Ⅱ式期)⇒機能喪失(・埋没?)⇒52住構築・使用(曾利Ⅱ式期末~Ⅲ式期)という一連の事象を想定することができる。特に小堅穴が墓墳であると考えた場合、集落内のある限られた範囲内の、割合と短い期間内においてもその空間利用の在り方は必ずしも継続的でないことを示しているといえる。

各小堅穴からは、合わせてテンバコ1個分程の土器片と、若干の石器類等が検出されており、第20図にはその一部を図示した。

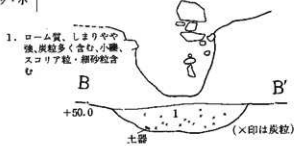
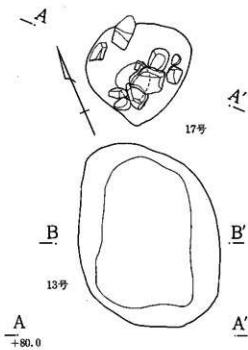
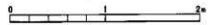
56は、おそらく前後半に属する浅鉢形土器で、4単位の波状口縁を呈し、その頂部にオサエを加えている。58から65は前期の土器片である。58は口縁直下から斜めの格子目文が施され、口縁のやや下に爪型文が巡る。口唇部にも格子目文と同じ原体による浅い刻み加えられている。60は口辺部が肥厚する深鉢の破片で、胎土中に繊維痕は認められない。61・62は半截竹管により施文された土器で、62は磨消し縄文となっている。63は結節縄文が施文されている。

66から69および71から75は中期に属するが、66以外は中期後葉のものである。70は前期中葉の土器片である。

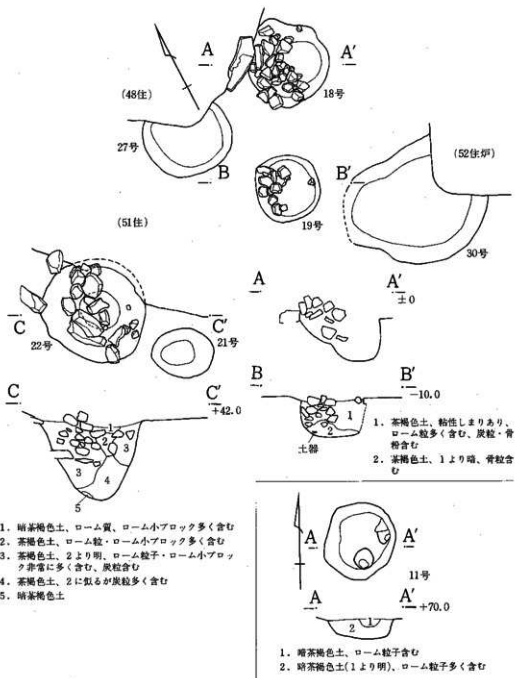
57は9号小堅穴出土の土器片鍾で、左辺は土器の口縁部をそのまま利用している。中期に属するものであろう。



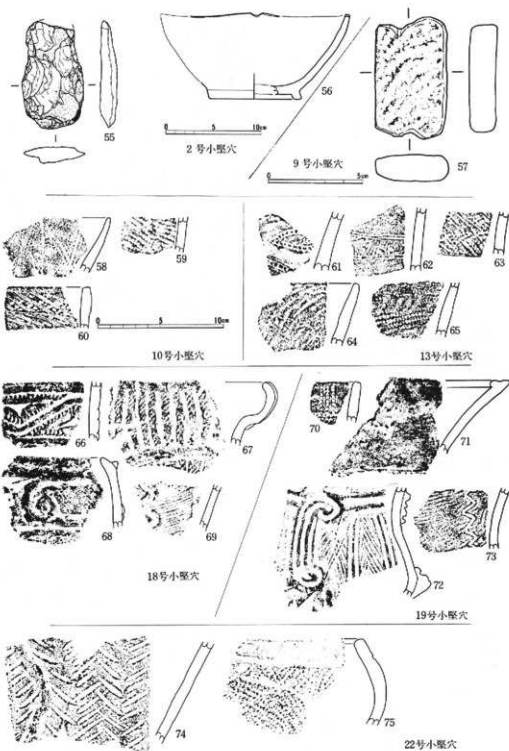
1. 茶褐色土、粘性・しまりあり、ローム粒含む
2. 茶褐色土、粘性・しまりあり、ロームブロック・ローム粒を非常に多く含む不均一層
3. 茶褐色土、粘性・しまりあり、1に似るが1より暗
4. 茶褐色土、粘性・しまりあり、ローム小ブロック・ローム粒多く含む、粘性の強い黒色土ブロック・小ブロック多く含む
5. ロームブロック
6. 茶褐色土、3よりローム粒多い



第18図 千鹿頭社遺跡5区縄文時代等小堅穴平面図・セクション図1 (S=1/40)



第19図 千鹿頭社遺跡5区縄文時代等小墜穴平面図・セクション図2 (S=1/40)



第20图 千鹿頭社遺跡5区縄文時代等小堅穴出土遺物 (56…S=1/4, 57…S=1/2, 他はS=1/3)

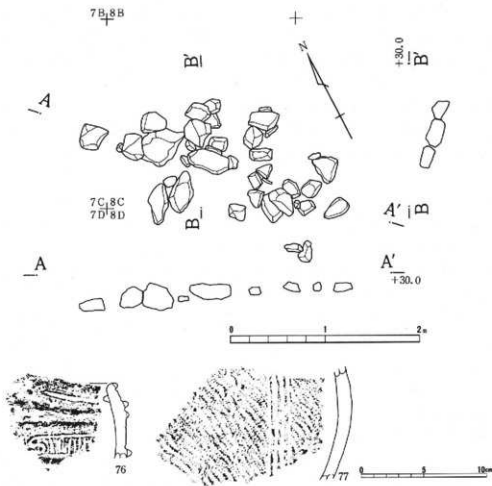
(3) 集石 (第21図)

52号住居跡の覆土上層から3号集石が、そしてやはり52住の壁際覆土中から4号集石が検出されている。3号集石・4号集石共に所属時期は中期後葉(52住廃絶後)と考えられるが、4号集石は住居跡確認面の壁際から床面にかけて斜めに落ち込むような状態を示しており、住居跡の廃絶時もしくは廃絶後まもなく構築されたと考えられる。

(4) その他の出土遺物 (第22・23図)

遺構外からも多くの遺物が検出されているが、紙面および時間的な都合から、代表的なもの・特徴的なものの一部を図示するにとどめる。

石器 定形の石器類としては60数点が検出されている。石鏃(78)は8点検出された。すべて黒曜石製であり、うち未製品・破損品が5点を占める。石匙は粗大品1点を含む3点が検出され



第21図 千鹿頭社遺跡5区3号集石平面図・エレベーション図(S=1/40)、出土遺物(S=1/3)

た。79はガラス質安山岩製の石匙で、つまみ部の上面に自然面が残る。また、表裏面ともに素材面を広く残している。打製石斧は15点検出された。80は硬砂岩製で刃部を一部破損している。81はホルンフェルス製の横刃形石器で、左辺が折損または折取られている。表面の一部に自然面を残す。裏面にはほとんど2次調整が加えられておらず、ネガティブな素材剥離面が残る。磨製石斧(82)は6点検出されているがすべて破損品または破片である。磨石・凹石類(83~86)は25点検出されており、ほとんどが輝石安山岩製である。83は破損品で、底面の他に柱状の素材の稜部が磨面になっており、いわゆる特殊磨石の類となる可能性がある。底面の中央には浅い凹みが認められ、凹石としても使用されたい。86は多孔質の輝石安山岩製凹石で、表裏両面に凹みを有する。おそらくカッターナイフでも充分削れるほど大変柔らかい素材を用いており、特に裏面は破損が著しい。表面の凹みはかなり大き目であるが、柔らかい素材を用いていることもあって、この凹みが凹み石として機能できる限界に近い状態まで使用された結果であると考えられよう。図示しなかったが、これらの遺物以外に石皿の破片1点と、土器片鏟および土製円盤各1点(いずれも破損品)が検出されている。また、原石・石核・剥片類等が多く検出されているが、ほとんどが黒曜石製である。黒曜石の原石(人工的な剥離が加えられていないと思われるもの)9点、黒曜石製石核・剥片類645点(うち肉眼観察により2次調整・使用痕と思われる微細な剥離等が認められるもの64点)が検出された。

土器 土器は器形全体を窺えるものはなく、87のみが復元実測可能であった。54号住居跡上面の出土で、矢羽根状の沈線が施文される。後期中葉の加曾利B式期に属する。

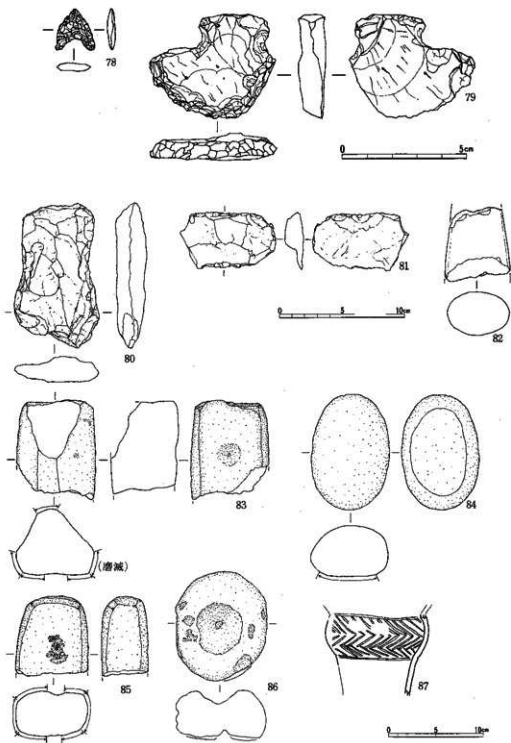
遺構外出土縄文土器片類の多くは中期に属するが、紙面の都合上拓影は他時期のものを割合多く掲載してある。

88~94は前期の土器で、すべて胎土に繊維を含まない。88・89は薄手で灰褐色を呈し、指頭圧痕が顕著に残る。東海系の土器であろう。90は口縁のやや下に櫛状工具による連続刺突文が加えられる。94は波状口縁を呈し、細い半截竹管状の工具により施文される。

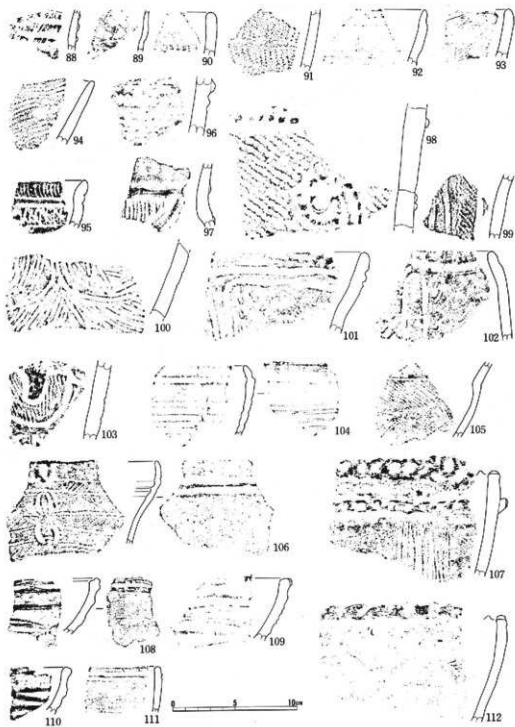
95~102は中期の土器である。95は中期初頭、96~98は後期中葉に属する。99~102は中期後葉の土器で、99は結節縄文に縦位沈線による区画が加えられている。

103~107・112は後期の土器である。103は磨消し縄文によって文様モチーフが描かれるもので、後期初頭に属する。104~106は後期中葉の土器である。107・112は後期のいわゆる粗製土器である。厚手で灰茶褐色~淡茶褐色を呈し、口唇部には斜め方向の連続的な強い指オサエ(?)が加えられている。107は口縁のやや下にやはり指オサエが加えられた隆帯が巡り、隆帯の直下からは櫛状工具による何単位かの縦位区画文が垂下する。

108~111は晩期後半の土器で、いずれも器面全体に丁寧なミガキが施される。109がやや淡い茶褐色を呈するほかはすべて黒褐色を呈する。108~110は浮線網状文が施文された土器で、108は口唇に沈線が巡り、細かな波状口縁を呈するらしい。109は口縁に小突起が付く。なお、晩期の土器片は図示したもの以外に数点が検出されたのみである。



第22图 千鹿头社遗址5区渣桶外出土遗物1) (78·79…S=2/3, 80~86…S=1/3, 87…S=1/4)



第23图 千鹿头社遗址5区遗物(2) (S=1/3)

2. 古代の遺構と遺物

(1) 住居跡および集石

48号A住居跡（第24～26図）

区域北側に位置する。遺構の約2分の1が区域外にあるため、全体のプランは明確でなく、カマドも検出されていないが、一辺4 m30cm程の方形を呈するらしい。48B住の覆土を掘り込んで構築しているため判別が困難であり、床面近くまで掘り下げた結果その存在が明らかになった。床面はロームを掘り込んで構築されており、はっきりした壁溝は検出されていない。ピットが4基検出されているが柱穴は明らかでない。遺構南隅近くの床面直上から須恵器(113)が1点検出されている。確実に遺構に伴う遺物が前記の須恵器1点のみのため、遺構の所属時期は明確でないが、8世紀代であろう。

48号B住とあわせ覆土中の遺物量は多いが、縄文時代の51住を壊して掘り込んでいるためか、その多くが縄文時代の遺物である。48号A・B両住居跡から約920点の土器片類が検出されているが、そのうち6割強が縄文土器片、3割強が土師器片で、須恵器片は35点のみである。灰軸陶器片は検出されていない。他に縄文時代の定形的石器類が10数点検出された。土師器・須恵器片は図示したもの以外はいずれも小片・細片であった。113は須恵器壺蓋または坏蓋で約10分の1周を欠くのみである。口径9.8cm、器高2.1cmを測る。

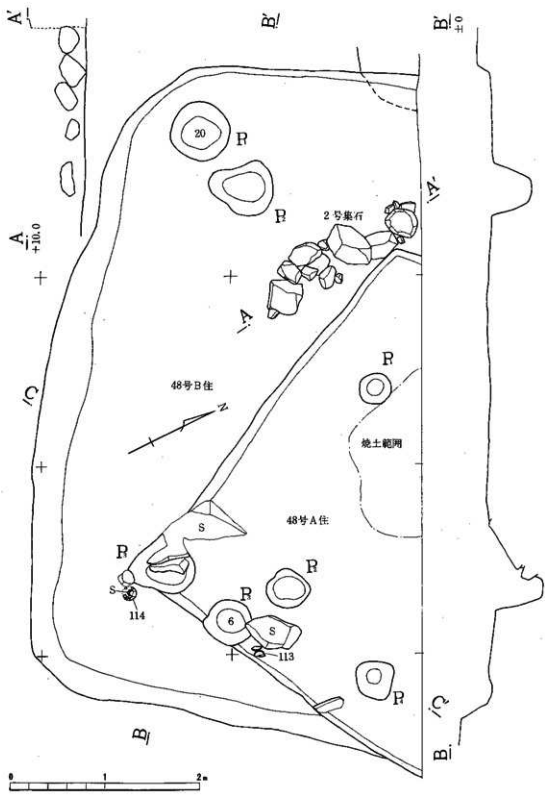
48号B住居跡・2号集石（第24～26図）

一辺約6 m60cmの方形を呈するらしい。51号住・9号小堅穴を切るが、中央部に48住Aが掘り込まれている。遺構のおよそ半分が区域外であるためカマドは検出されていないが、北西側の壁際に焼土が散っており、この壁側にカマドが存在するものと思われる。また、この付近の覆土中に人頭大の礫を用いた2号集石が位置しているが、本遺構との関係は不明である。支柱穴はP2・P3が該当する。P3島の床面直上に伏せたかたちで土師器坏が1点検出されている。遺構の所属時期は48号A住同様明確でないが、出土遺物から7世紀代であると思われる。

遺物は48号A住の項で述べたような状況であり、図示できたのは1点のみである。114は丸底の土師器坏で、約2分の1個体が残存する。外面は調整はヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキが加えられるが、口縁付近に特に強いヨコヘラケズリが加えられて稜をなす。内外面共に、細くて大変密なヨコヘラミガキが施されている。



第24図 千度頭社遺跡5区48号A・B住居跡出土遺物（S=1/3）



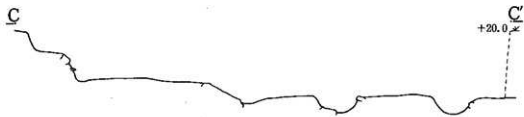
第25図 千鹿頭社遺跡5区48号A・B住居跡・2号集石平面図・エレベーション図 (S=1/40)

50号住居跡・1号集石（第27～30図）

50住は区域南隅に位置するが、カマド付近以外は床面が堅くなく、しかも大部分が縄文時代の53住覆土中に床を構築しているため、規模や平面プラン等ははっきりしない。北壁の中央部付近に平石を両ソアの芯に用いた、しっかりとした石組みのカマドを有し、カマド内には焼土が厚く堆積していた。やや北寄りの覆土中には1号集石が検出されている。主柱穴は明確でないが、P3・4が該当すると考えられる。P4については、53号住居跡の項で述べたように53号住居跡（縄文中期）の炉石を抜去して掘り込んでいる。1号集石下の推定床面付近には第27図の点線の範囲内を中心として焼土が散っていた。この焼土については検出当初本住居跡の下層にある53号住居跡の覆土または炉の覆土の攪乱による浮き上がりとして捉えていたが、50号住居跡調査後53住まで掘り進めた結果、50住の床面に散っていたものであることがわかった。ただし、1号集石の覆土中には焼土が認められなかったため、1号集石構築以前のものであると思われる。

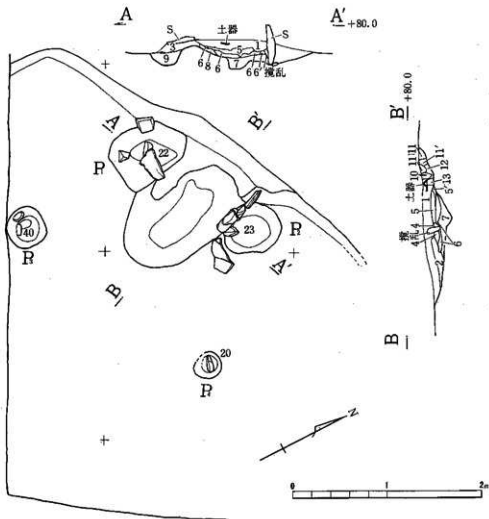
遺物はカマド付近を中心に土師器壺類が検出されている。また、カマドの西側床面上から鉄製の紡錘車が1点検出された。覆土中の遺物は、本住居跡の床面が現地地表下30～40cmと浅いうえに48号A・B住居跡と同様縄文時代中期の住居跡覆土を掘り込んで構築していることもあり、出土土器片約810点中約6割強を縄文土器が占めていた。また、土師器片のほかは須恵器片が30点ほど検出されているが、灰軸陶器片は検出されていない。土師器片についてはほとんどが甕の破片であった。これらのほか縄文時代の石器類等もかなり検出されている。

115は混入品で、ホルンフェルス製の石器である。両面中央部付近に素材剥片の面を広く残す。116・117は須恵器の環と蓋で、約8分の1～10分の1個体からの復元実測である。いずれも覆土中の小破片のため、本住居に伴うものであるかどうかは不明である。118から122は土師器甕で、何れも胎土に金雲母片・石英粒・砂粒を含む。118は長胴の甕で口径21.1cmを測り、胴部下半は欠損する。内面～頸部外面まではナデ、胴部外面はナナメ～タテ方向のケズリが加えられている。119はカマド北側の壁際から検出された。胴部下半を3分の2周ほど欠く。口径16.8cm・推定底径8.4cm・器高17.2cm・胴部最大径17.2cmを測る。内面から胴部外面にかけてはナデ、底部近くの外面には回転ヘラケズリが加えられ、底面は未調整（ナデ？）である。120は底面に木葉痕を、胴部下半内面に輪積み痕を残し、外面はナナメおよびタテ方向のナデ状のヘラケズリが加えられてい



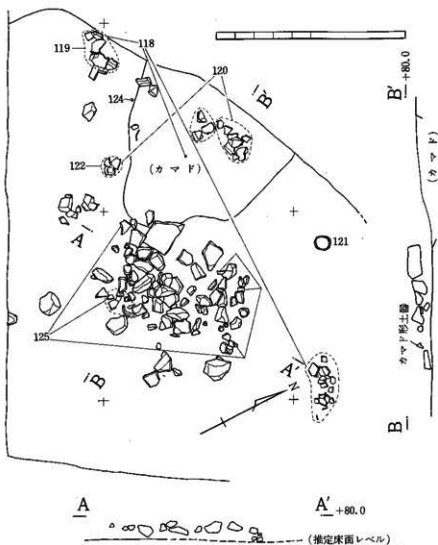
第26図 千歳頭社遺跡5区48号A・B住居跡・エレベーション図（S=1/40）

- 土層注記
- | | |
|------------------------------------|-------------------------------------------|
| 1. 茶褐色土、粘性・しまりあり、ローム粒・焼土粒・炭粒多く含む | 7. 暗黄褐色土、粘性強・しまりあり、ローム質、ローム粒多く含む |
| 2. 茶褐色土、1よりやや明、ローム粒1より多く含む | 8. 赤褐色土、ローム粒・焼土粒非常に多く含む |
| 3. 明茶褐色土、粘性・しまりあり、ローム粒多く含む | 9. 茶褐色土、3より明、ローム粒・小ブロック多く含む炭粒やや多く含む、焼土粒含む |
| 4. 暗黄褐色土、粘性強・しまりあり、ローム粒・焼土粒非常に多く含む | 10. 赤茶褐色土、ローム粒・焼土粒多く含む |
| 5. 暗黄褐色土、粘性強・しまりあり、4よりやや明 | 11. 暗黄褐色土、ローム粒多く含む、焼土粒含む |
| 5' 明黄褐色、焼けたローム | 11' 暗黄褐色土、11より焼土粒多く含む |
| 6. 赤褐色土、粘性・しまりあり、焼土 | 12. 暗黄褐色土、11'よりやや明 |

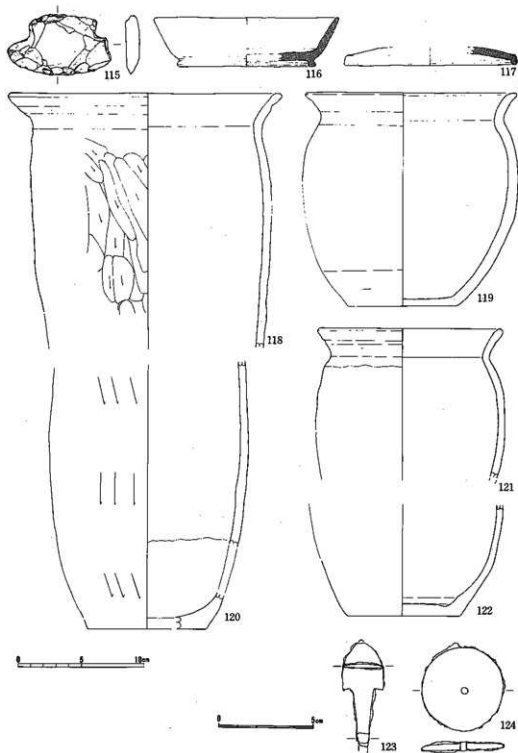


第27図 千鹿頭社遺跡5区50号住居跡平面図 (S=1/40)

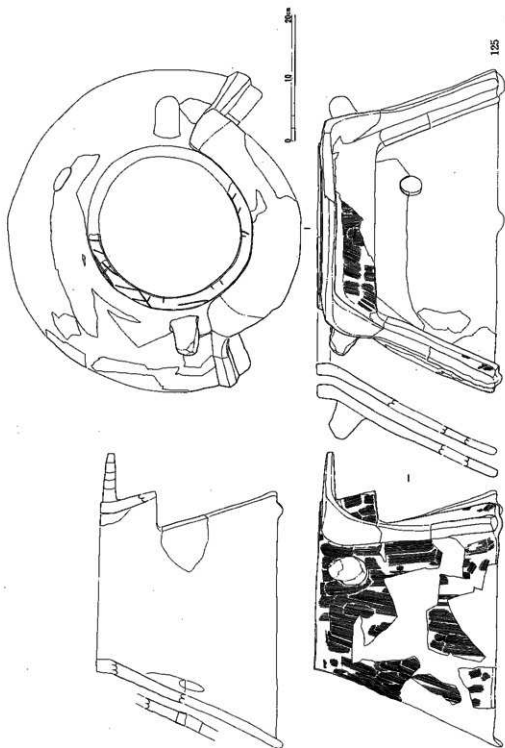
る。121は住居跡北隅付近の床面レベルで、伏せたように逆位で検出された獲胴部上半である。口径14.1cm・胴部最大径14.0cmを測る。頸部以下外面は剥落が著しいが、タテ～ナナメ方向のナデ状ケズリが加えられる。122は床面上で正位で検出されているが胴部上半は欠く。やはり外面の剥落が著しい。底面にはナデが加えられて指頭圧痕が残る。123は覆土中出土の鉄鏃で、現存部分で9.8gを量る。124はカマド脇で検出された鉄製の紡錘車で、直径4.4cm・重さ24.8gを量るが



第28図 千鹿頭杜遺跡5区50号住居跡遺物分布図・1号集石平面図・エレベーション図(S=1/40)



第29図 千鹿頭社遺跡5区50号住居跡出土遺物1 (S=1/3, 123・124のみS=1/2)



第30図 千鹿頭社遺跡5区50号住居跡出土遺物2 (S=1/6)

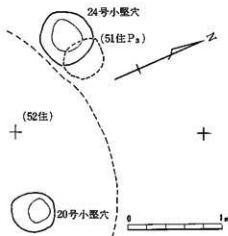
芯棒を欠き、中心部には円孔が開いている。

125はカマド形土器で、1号集石および50号住居跡覆土中から破片が検出された(耕作等による攪乱のためと思われるが、4B・5～6C・8D各グリッドの耕作土中からも破片が検出されている)。器壁の焚口部分切り取り後、粘土紐を重ねた底を貼り付けた付底式のカマド形土器、1対の把手を有するものと思われ、背面には中心からやや外れた場所に円孔が1基あけられている。外面は、タテ～ナナメ方向のハケ目調整を行った後、底等の張り付けを行い、その周辺部にナデを加えている。内面には丁寧なナデが加えられ、一部に煤の付着が認められる。また、釜孔の口唇部には木葉痕を残す。器高24.9cm・釜孔内径約22cmを測り、胎土に石英粒および砂粒を含む。淡茶褐色を呈するが焼成はやや甘い。

このカマド形土器については、検出時の状況から、1号集石構築時に破片の状態で廃棄されたと考えられる。1号集石の下端は、推定床面とはほぼ同レベルであることから、1号集石は50住廃棄時もしくは廃棄後まもなく構築され、この時同時にカマド形土器が廃棄されたものであろう。

(2) 小堅穴 (第31図)

古代に属すると思われるのは20および24号小堅穴である。覆土は黒色土で、20号小堅穴は52住覆土上面で確認されている。形態・覆土の共通性および位置関係から2基の小堅穴は1つの遺構(堅穴住居跡または建物跡)に属する柱穴である可能性が高いが、床面等が検出されておらず全体のプランも不明であるため一応個別の小堅穴として扱った。詳しい所属時期は不明である。覆土中から縄文土器片等が検出されている。



第31図 千鹿頭社遺跡5区20-24号小堅穴
平面図 (S=1/40)

(3) その他の出土遺物 (第32図)

土器器片・須恵器片等が検出されているが、図示したものを以外に器形全体を窺えるものはない。

9Cグリッドの耕作土中(現地表下約5cm)から灰陶陶器碗(126)が1点検出されている。口縁部を一部欠損する以外はほぼ完形であり、口径14.3cm・底径6.8cm・器高6.5cmを測る。重ね焼きのため器壁外面に他個体の口縁部が一部融着しているほか、内面底部には台部の融着痕が認められる。所属時期は折戸53窯式期に相当しよう。



第32図 千鹿頭社遺跡5区遺構外
出土遺物3 (S=1/3)

3. 附 表

表1 千鹿頭社遺跡5区小堅穴一覽表

小堅穴No.	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	構造	出土品・備考	小堅穴No.	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	構造	出土品・備考
5-1	8F	5.4	4.8	2.3	溝状	遺物なし	5-15	(穴・溝)	-	-	-	溝状	遺物なし
5-2	8F-F	4.4	4.0	1.0	溝状	遺物なし	5-17	9F	1.5	1.0	1.8	溝状	遺物なし
5-3	8F-F-Q	6.2	5.8	4.4	不明	遺物なし	5-18	9F	0.8	0.8	5.0	溝状	遺物なし
5-4	4-F-Q	8.3	9.3	4.5	不明	遺物なし	5-19	7D	7.0	6.8	4.0	溝状	遺物なし
5-5	10	8.1	6.1	4.3	不明	遺物なし	5-20	8B-C	4.8	4.3	3.1	溝状	遺物なし
5-6	1-F-D-E	-	-	3.7	不明	遺物なし	5-21	8B-C	6.8	5.0	-	溝状	遺物なし
5-7	2D	8.4	7.0	3.8	溝状	遺物なし	5-22	9D-E	11.3	9.5	8.2	溝状	遺物なし
5-8	4-D	8.2	8.1	8.2	溝状	遺物なし	5-23	8-C	1.4	5.0	4.8	溝状	遺物なし
5-9	1-F-C	2.0	-	4.1	不明	遺物なし	5-24	7B	-	3.4	4.7	溝状	遺物なし
5-10	3F-Q	10.3	10.5	8.2	溝状	遺物なし	5-25	(穴・溝)	-	-	-	溝状	遺物なし
5-11	8F	8.3	7.8	2.5	不明	遺物なし	5-26	8-B-C	8.0	-	3.2	溝状	遺物なし
5-12	(穴・溝)	-	-	3.0	溝状	遺物なし	5-27	6-F-G	8.0	-	3.0	溝状	遺物なし
5-13	4-F	18.7	15.0	3.0	溝状	遺物なし	5-28	9B-C	6.8	-	3.7	溝状	遺物なし
5-14	8	8.0	7.0	2.0	溝状	-	5-29	8-B	8.8	7.4	4.4	溝状	遺物なし
5-15	8	10.5	8.4	2.3	溝状	遺物なし	5-30	7-B	-	12.0	4.0	溝状	遺物なし

※注1 >〇〇生・〇〇〇生を切る <〇〇生……〇〇生に切られる ※注2 土器以外の出土遺物については別添表を参照のこと

表2 千鹿頭社遺跡5区実測区掲載石器等一覽表 (カッコ内の数値は破損品の現存数)

品類No.	出土位置	材 質	最大径(m)	最大径(m)	最大径(m)	重量(g)	材 質	欠 損 部 位	備 考
1.0	8-1F	石 髓?	7.1	4.1	1.2	32.3	ガラス製	山表	
1.1	8-2F	石 髓	4.8	2.3	0.9	8.8	チャート		
1.2	8-3F	石 髓	3.1	1.8	0.6	0.4	黒曜石		
1.3	8-1F	石 髓	3.1	1.6	0.3	0.1	黒曜石		洞窟に自然発生
1.4	8-1F	石 髓	3.1	1.6	0.4	0.8	黒曜石		
2.9	8-2F	石 髓	2.7	1.7	0.4	1.0	黒曜石		
3.0	8-1F	石 髓	(1.8)	(1.3)	0.4	(0.8)	黒曜石	片 欠	洞窟に多く有り
3.1	8-1F	石 髓	(1.8)	(1.3)	0.4	(0.8)	黒曜石	片 欠	
3.2	8-2F	石 髓	5.1	3.2	1.0	12.7	黒曜石		
3.3	8-2F	石 髓	5.0	4.2	1.2	21.3	ガラス製	山表	
3.4	8-2F	石 髓	8.2	4.8	1.1	89.8	ガラス製	山表	
3.5	8-2F	石 髓	8.2	4.8	1.1	89.8	ガラス製	山表	
3.6	8-2F	石 髓?	2.4	1.5	0.4	1.9	黒曜石		
3.7	8-1F	打製石片	12.3	6.2	2.0	11.8	黒曜石		洞窟に自然発生
3.8	8-1F	石 髓	(1.3)	0.8	0.0	(1.4)	黒曜石		洞窟に自然発生
3.9	8-2F	石 髓	12.1	5.8	2.3	17.8	黒曜石		基部・先端
3.10	8-2F	石 髓	(9.7)	5.4	1.8	(10.3)	黒曜石		
3.11	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.12	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.13	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.14	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.15	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.16	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.17	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.18	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.19	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.20	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.21	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.22	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.23	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.24	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.25	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.26	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.27	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.28	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.29	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.30	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.31	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.32	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.33	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.34	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.35	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.36	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.37	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.38	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.39	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.40	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.41	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.42	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.43	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.44	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.45	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.46	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.47	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.48	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.49	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.50	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.51	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.52	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.53	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.54	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.55	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.56	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.57	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.58	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.59	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.60	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.61	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.62	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.63	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.64	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.65	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.66	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.67	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.68	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.69	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.70	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.71	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.72	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.73	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.74	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.75	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.76	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.77	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.78	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.79	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.80	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.81	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.82	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.83	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.84	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.85	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.86	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.87	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.88	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.89	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.90	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.91	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.92	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.93	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.94	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.95	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.96	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.97	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.98	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.99	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		
3.100	8-2F	石 髓	(8.0)	(4.8)	(2.8)	(3.0)	黒曜石		

V 結 語

千鹿頭社遺跡は、有賀時を流下する中沢川の形成した、東南向きの扇状地上にある。この扇状地上に北側から千鹿頭社遺跡、十二ノ后遺跡、女帝垣外遺跡、丹羽屋敷遺跡、清水遺跡と続く。千鹿頭社遺跡は扇状地上、中央と北側一帯に展開するものとみられる。したがって、諏訪湖盆でも最大級の縄文・奈良・平安の重複遺跡であり、ことに古代集落と有賀時の関係は、西からの文物の伝播を考えるうえに、強い相関関係をもつものといえる。

今回の発掘調査の成果をみると、縄文時代中期後半住居址5軒、古代・平安時代3軒。その他小堅穴・集石址などの遺構があり、これに伴う出土遺物も多い。

縄文時代中期後半の住居址は、完形な住居址は少なかった。このなかで52号住居址は、いわゆる「同心円上直建し住居址」（宮坂1971）である。住居址平面形プランは、方形を円にした形である。炉址は方形石囲炉が上層の貼床に対応し、貼床下に石を抜いた炉址が発見され、石囲炉の北端と一部重なる。また埋甕は二つ発見され、北東壁近くに埋甕1、南壁近くの埋甕2は貼床下から発見された。柱穴は主柱穴4本とされている。住居址入口部は周溝の切れた部分の、北東壁および南壁とみられる。同心円上直建し住居址の例の多くは、柱穴の移動が確認されるが、本52号住居址にはそれがみられない。埋甕1と埋甕2からみると、土器型式であまり時間差がないとみられる。この点から考えると、堅穴プランと上層構造は変更せず、炉の作り替え。床面の貼床による新住居。そして古い埋甕をそのままにして新しい埋甕を、南方に新設の入口部に埋設したと見られる。また本52号住居址の出土土器46・48は、縄文地文の加曾利E系とみられる土器であり、曾利式系と伴出するのはこの頃からである。このように52号住居址は、唐草文系土器と、加曾利E系土器の伴出という現象が認められる。54号住居址も発掘面積は狭いが、土器53・54は、縄文後期土器に変化してゆく過程をみせる土器であり、伴出の礫石錘は後期に伴出する石錘（宮坂1984）であり、注目すべき住居址である。

古代の50号住居址は、カマド及び土器の発見はあるが、床面の攪乱が多い。50号住居址は鹿柄直後、浅い凹部状況の部分に、据えカマドと石を廃棄（集石）したとみられる。据えカマドの復元からみると、厚手土師質、台形、庇付焚口、把手1対付の形で、荷搬性のカマドである。据えカマドと呼ばれているが、県内出土例は、報告された三の宮遺跡例（長野県埋蔵文化財センター他1990）・未報告の恒川遺跡例（註1）の外には聞いていない。一般的には西日本にみられるという。本例の出土状況からみて、日常用具ではなく、宗教的な用途と考えてよいとみられる。

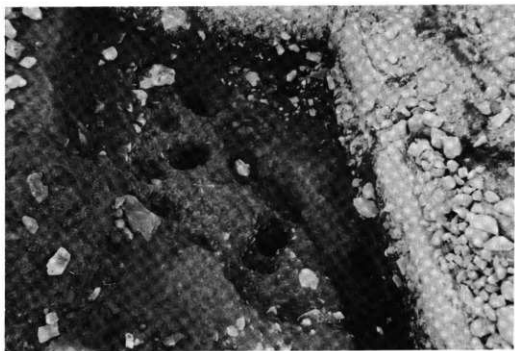
鉄製紡錘車の糸車の出土は、紡錘車形態上、糸車と芯棒一体形より前駆的な、糸車と芯棒の別個体の例である。土製あるいは石製糸車の系譜をひくものといえよう。

今回の千鹿頭社遺跡5区の発掘調査は、小範囲であったものの、縄文中期および古代の遺構・遺物に、学術上極めて貴重な資料を提出したものとといえよう。

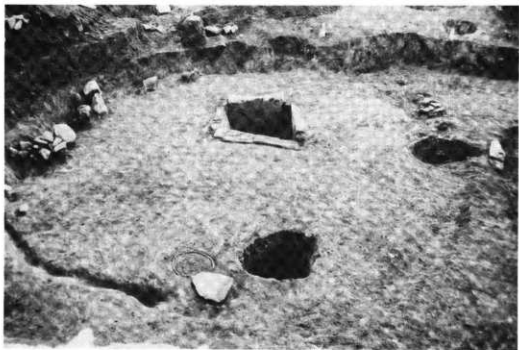
註1 飯田市教育委員会 小林正泰氏御教示による。



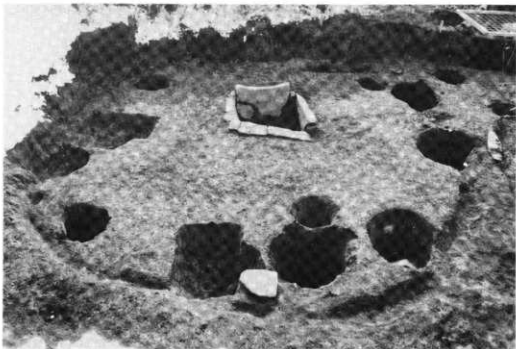
調査状況(西から)



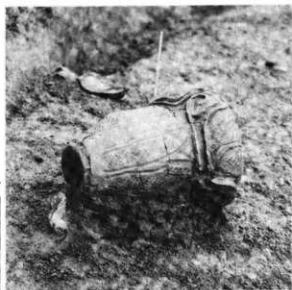
49・54号住居跡(南東から)



52号住居跡（北東から）



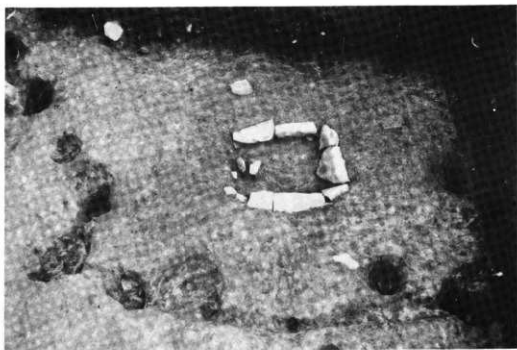
52号住居跡（北東から）



出土土器46 ▶



埋壁No. 2 ▶
47



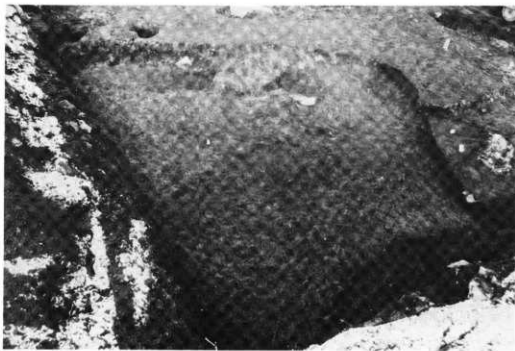
53号住居跡（東から）



▲ 2号小堅穴検出状況

▼ 18号小堅穴検出状況





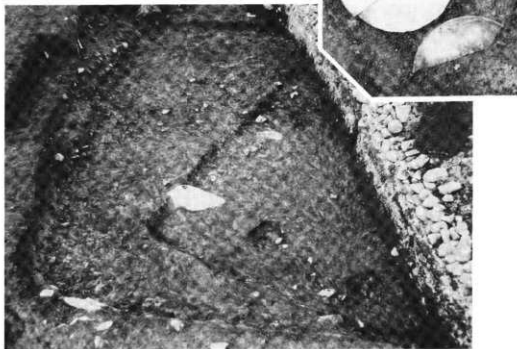
50号住居跡（南から）



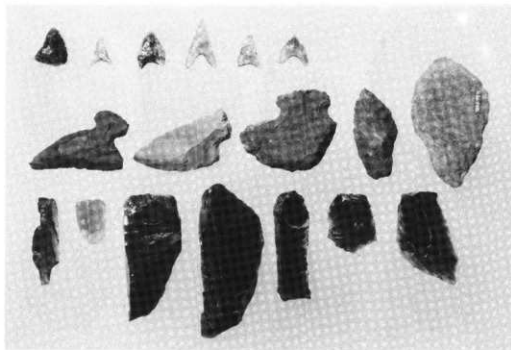
50号住居跡（カマド断面の状況）



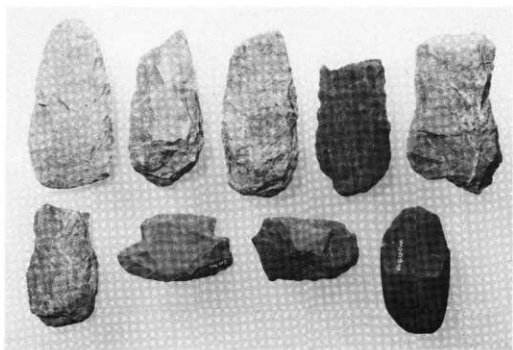
1号集石



48号A・B住居跡と出土土器(113)



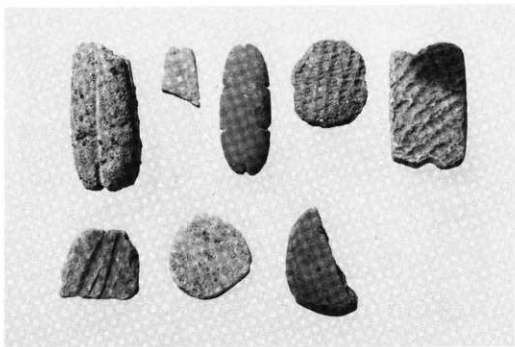
出土石器その1 (約1/2)



出土石器その2 (約2/5)



出土石器その3 (約2/5)



出土石製品・土製品 (約1/2)



埋 甕 1 45



46



埋 甕 2 47



48



◀53



54号住居跡出土土器(約1/4)

◀54

2号小塚穴出土土器(約1/4)

56▶





113



114

49号A・B住居跡・出土土器
(約1/4)



118



119

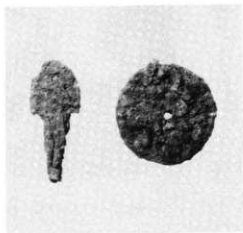


121

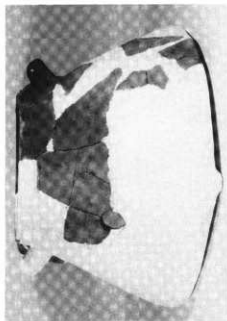
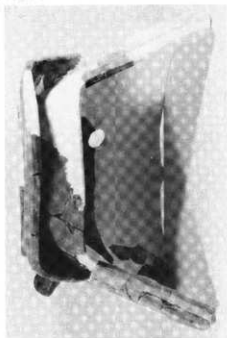
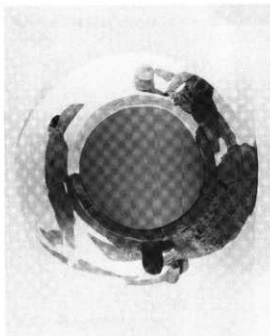
50号住居跡出土土器 (約1/4)



遺構外出土土器 (約1/4)



50号住居跡出土鉄製品 (約3/5)



1 身兼石出土カマド形土器 (約 1/5)

千 鹿 頭 社 Ⅳ

—長野県諏訪市千鹿頭社遺跡第5次発掘調査報告書—

1991年3月30日

編集 諏訪市高島1-22-30
発行 諏訪市教育委員会
印刷 ㈱マルジョー上田印刷
